

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ロウバイ *Chimonanthus praecox* (L.) Link var. *praecox* (ロウバイ科 Calycanthaceae)

新春を迎え、まだ春浅い山裾を歩いていると、とある民家の庭からほのかな香りが漂ってきます。思わず辺りを見渡すと、艶のある黄色い花をびっしりつけた低木を見かけることがあります。これがロウバイ（臘梅）です。ロウバイは主に中国中部に分布する高さ2～4mの落葉低木で、長さ10～20cmの全縁、長楕円形または卵状長楕円形で先の尖った葉をつけます。葉が出る前に直径約2cmの強い芳香のある花をつけますが、多数ある花被片のうち、外側のものは黄色、内側のものは短く紅紫色を呈しています。雄しべは5～6本あり、内側のものは仮雄しべです。また、瘦果は長さ約3.5cmの楕円体の果床に包まれています。ロウバイ属は2～6種あり、いずれも落葉または常緑低木で、属名も「冬 cheimon」「花 anthos」を意味するギリシャ語に由来しています。ロウバイは英名を winter sweet といいますが、日本へは、17世紀の初めに中国から朝鮮半島経由で渡来したとされ、日本を含む温帯各地で広く栽培されています。

ロウバイの名は漢名の「臘梅」の音読みですが、花が蜜蝋（ミツバチの巣を加熱・圧縮して採取した蝋で、艶出し剤、化粧品などに利用される）を連想させるからとも、臘月（陰暦12月の異称）にウメに似た香りの花をつけるからともいわれています。ロウバイには香りが強く、内側の花被片も黄色いソシンロウバイ var. *concolor* Makino（素心臘梅）や花が大きいトウロウバイ var. *grandiflorus* (Lindl.) Makino（唐臘梅）などの園芸品種があります。薬用としては、1月中旬ごろ、開花前の花蕾を採取し、風通しの良い場所で、陰干しにしたものを「臘梅花」といい、ねつびょうほんかつ熱病煩渴、解熱、鎮咳、鎮痛薬として咳嗽、小児麻痺、百日咳、やけどなどに用います。成分については、花蕾に cineol, borneol, linalool, camphor, 種子にアルカロイドの calycanthine などを含み、calycanthine は動物に対して、ストリキニーネ様の作用を示し、ウサギの摘出腸管、子宮に対して



写真1 ロウバイ (花)



写真2 ソシンロウバイ (花)



写真3 トウロウバイ (花)



写真4 ロウバイ (遠景)



写真5 ロウバイ (果実)



写真6 臘梅園 (宝登山)

興奮作用がみられます。

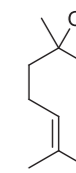
埼玉県長瀨宝登山（ホドサン）には約3,000本のロウバイが栽植されている「臘梅園」があり、関東唯一のロケーションを誇っています。縁起の良い山の名前のご利益もあってか、早春の良く晴れた日、多くの観光客で賑わいます。



cineol



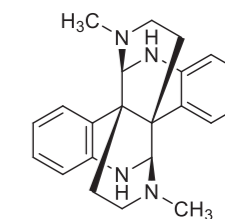
borneol



linalol



camphor



calycanthine

図1 成分の構造式